

現場へ!

人はみな自らの人生を実験

障害って何? ③

21世紀の先端とは何か?

1999年、新世紀を前に東京大学先端科学技術研究センターで議論になった。「20世紀は広大な宇宙へ、極微の素粒子へと『外』へ向かうのが最先端だった。21世紀は人間の内部、より複雑なもの

の中に分け入っていくのが先端科学では」。でも、どうやって?

「極限に本質が現れる。極限状態にいる素晴らしい人材はいないか」。教授たちが探しあてたのが、当時37歳で金沢大にいた福島智(57)。目が見えず耳が聞こえない

研究者だ。無念や苦悩を挑戦のエネルギーに変える底力、そしてユーモア。2001年春、福島は助教授に迎えられる、バリアフリー分野を立ち上げて今、教授だ。

以来、能力主義的な発想を批判する研究に取り組む。「能力の差

を存在の価値に連動させてしま

う、人間の存在の内面にくいこむ差別的なもの、価値の序列的体系。それを障害を通して考察し、批判的に研究したい」。能力主義から解放されなくては、人は幸せになれないと考えたからだ。

日本は14年に批准。今夏、政府が権利条約を守っているか国連に審査されるはずだった。だが、コロナ禍で来年に延期となった。

朗報がある。当事者など13団体でつくる「日本障害フォーラム」は、政府報告に対抗して、国連に実情を訴える「パラレルレポート」を出す予定だが、3月24日の勉強会に、「認知症当事者ネットワークみやぎ」の代表理事、丹野智文(46)が参加したのだ。こうした障害者団体と認知症当事者の連携は初めてのことで。

が尊重されているか、国連に調査を求めた。「私たち抜きに私たちのことを決めないで!」。丹野の訴えはまさに権利条約の神髄だ。

福島は丹野を「認知症と他の世界をつなぐ人」と感じている。80代後半まで生きると半数近くが認知症になる時代。人生の最終章はだれもが支えを必要とする。福島は、羽をもがれるようにして3歳で右目、9歳で左目、14歳で右耳の視聴覚を失い、18歳で全盲ろう。無音漆黒の世界にいる。「光と音がない世界でどう生きるか、私はその実験を生涯かけて、ずっとしているようなものですよ」と笑った。そして、「人はみな、一生かけた『人生実験』をしているようなものですね」ともいった。



福島智(右)は3歳で右目、9歳で左目、14歳で右耳の視聴覚を失い、18歳で全盲ろうに。「障害とは何か? 生きる」という二冊の東京目黒区、中井征勝撮影



「日本障害フォーラム」の懇親会に、認知症当事者の丹野智文(後列右から3人目)が初参加。佐藤聡(前列中央)らと、「認知症も障害の一つ」と一気のうちとけた=東京都新宿区、馬籠久美子さん提供



指先で聴く、福島。インタビューの質問内容は、通訳者の指(上)が、ピアノを弾くように、福島の指先(下)に「指点字」を打って伝えてくれた

障害と差別は分かちがたい。06年、21世紀最初の人権条約、障害者権利条約が国連で採択された。この条約が画期的なのは「差別とは『理にかなった対応をしないこと』と明記した点」だと福島はいう。何が差別か、政府や法律は明確にしてこなかったからだ。日本政府訳は「合理的配慮」だが、「気の毒だから『配慮』してあげる、では上から目線で違う。意識すれば『当然の対応』」と福島。何を「当然の対応」とするかその社会の人間観が問われる。

話をしてきた。当事者になって初めて知った「本人の意に反した精神科病院への入院の多さ」を訴え、家族ではなく「本人の意思」

障害って何?と問うことは、人間とは何か、生きるとは何か、と問うことだ。 敬称略(おわり) (生井久美子)